

エドゥアルト・シュトラウス没後 100 年を祝して

曲 目 解 説

若宮 由美 (op.257)

2016 年はシュトラウス家の末弟エドゥアルト (1835~1916) の没後 100 年にあたります。彼は 1870 年以降、父ヨハン 1 世 (1804~49) の創設したシュトラウス楽団を率いてファミリー企業を支え、1872 年には兄ヨハン 2 世 (1825~99) から宮廷舞踏会音楽監督の職も引き継ぎました。同職は父の就任から 65 年余にわたりシュトラウス家が独占したことになります。エドゥアルトは舞踏会や日曜ごとに楽友協会で開催されたシュトラウス・プロナード・コンサートなどを指揮し、曲も供給しました。300 曲以上の自作のほか、多くの編曲を手がけています。演奏旅行で訪れた地も多く、彼の「お薬手帳」には世界各地の薬局のスタンプが押されています。現在のシュトラウス家当主エドゥアルト・シュトラウス (1955~) は、エドゥアルトの曾孫にあたります。

第一部

ローベルト・シュトルツ：〈国連行進曲〉

Robert Stolz: *UNO-Marsch*.

グラーツ生まれのシュトルツ (1880~1975) はナチスを逃れてアメリカに移住し、そこで「ウィーン之夜」と題するコンサート・ツアー (シュトラウス音楽などで構成) を指揮して、名声を高めました。この行進曲は、黒人初のノーベル平和賞受賞者ラルフ・バンチ (1904~71) の薦めで作曲され、国際連合に献呈されました。2016 年はロンドンで第 1 回国連総会が開催されてから、70 年目にあたります。シュトルツによる自筆の作品目録には、同行進曲が op.1275 として記載されています。

ヨハン・シュトラウス 2 世：〈宝のワルツ〉 op.418

Johann Strauss Sohn: *Schatz-Walzer*. op.418

〈宝のワルツ〉は、オペレッタ《ジプシー男爵》に登場する 3 拍子のメロディーを集めて構成されています。オペレッタは 1885 年 10 月 24 日、ヨハン 2 世の 60 歳の誕生日前日にアン・デア・ウィーン劇場において初演され、大喝采を得ました。〈宝のワルツ〉は 1885 年 11 月 22 日のシュトラウス日曜コンサートで、作曲家自身の指揮で演奏されました。曲のタイトルは、オペレッタの中で「宝物」をみつけた時のメロディーに由来しています。

ヨハン・シュトラウス 2 世：ポルカ・フランセーズ〈ヴィオレッタ〉 op.404

Johann Strauss Sohn: *Violetta. Polka française*, op.404

オペレッタ《愉快な戦争》は 1881 年 11 月 25 日にアン・デア・ウィーン劇場で初演されました。劇はイタリアの 2 つの小国が戦争を繰り広げる話であり、ヴィオレッタは勝者に与えられるロメッリ侯爵夫人 (未亡人) の名前です。このポルカは、オペレッタのモチーフに基づきます。ピアノ初版譜に描かれた彼女は、剣を床に突き立てた勇敢な姿をしています。1882 年 1 月 15 日のシュトラウス日曜コンサートで作曲家自身の指揮で初演されました。

ヨハン・シュトラウス 2 世：ポルカ・シュネル〈観光列車〉 op.281

Johann Strauss Sohn: *Vergnügungszug. Polka schnell*, op.281

19 世紀は鉄道の時代といわれます。オーストリア帝国内での蒸気鉄道は 1837 年 11 月に敷かれ、60 年代にはウィーンからポーランド方面に向う北部鉄道、イタリアのトリエステに通じる南部鉄道、ザルツブルク経由でドイツに向う西部鉄道が整備されました。それに伴って観光も発展しました。当時の新聞には、日帰りの観光列車の広告が散見されます。この急速なポルカは、1864 年 1 月 19 日に王宮のレドゥーテンザールで開催された諸産業統合連盟の舞踏会で初演されました。

カール・ミヒャエル・ツィーラー：ワルツ〈ウィーン娘〉 op.388

Carl Michael Ziehrer: *Weana Madl'n. Walzer*, op.388

ツィーラー（1843～1922）はウィーン生まれの作曲家。軍楽隊長を経て、エドゥアルト・シュトラウスの後任として 1908～18 年にオーストリア＝ハンガリー帝国における最後の宮廷舞踏会音楽監督を務めました。同曲は彼の代表作であり、1887 年 10 月 30 日にラントシュトラッセ（現在の 3 区）にあったドレーアー館で初演されました。ラガービールの醸造家であったドレーアーの娯楽施設では数々の舞踏会が開催され、エドゥアルトもしばしば登場しました。〈ウィーン娘〉は初演で成功を収め、6 回アンコールされました。

エドゥアルト・シュトラウス：ギャロップ〔ポルカ・シュネル〕〈速達郵便で〉 op.259

Eduard Strauss: *Mit Extrapost. Galopp*[*Polka schnell*], op.259

エドゥアルトはシュトラウス楽団を率いて、しばしば演奏旅行に出かけました。1887 年には南ドイツへ出かけ、10 月半ばに帰郷。ウィーンに戻って初のシュトラウス日曜コンサートが同月 23 日に楽友協会で開催され、旅の思い出を込めて同ポルカが初演されました。

第二部

ヨハン・シュトラウス 2 世：オペレッタ《ヴェネツィアの一夜》序曲（ウィーン版）

Johann Strauss Sohn: *Ouverture zu "Eine Nacht in Venedig" (Wiener Fassung)*

《ヴェネツィアの一夜》はヨハン 2 世による 10 作目のオペレッタで、ベルリンのフリードリヒ・ヴィルヘルム劇場で 1883 年 10 月 3 日に初演されました。ウィーン以外で初演された唯一の作品です。シュトラウスのオペレッタに親しんでいたはずの観客の反応は芳しくなく、10 月 9 日のウィーン初演に向け、急遽手直しがなされます。序曲は 5 箇所に入られました。

エドゥアルト・シュトラウス：ポルカ・シュネル〈羽目はずして〉 op.168

Eduard Strauss: *Außer Rand und Band. Polka schnell*, op.168

1870 年頃からヨハン 2 世は劇音楽に取り組み、ダンス音楽とは距離を置くようになります。さらに兄ヨーゼフの死も重なり、楽団の運営はエドゥアルトに託されます。舞踏会を仕切る彼は、数々のワルツも作曲しましたが、ニューイヤークンサートではポルカ・シュネルがもっぱら演奏されています。ニ長調の軽快なポルカはシュピーナ社による楽譜広告が 1878 年夏に新聞掲載されましたが、初演日はわかりません。

ヨーゼフ・シュトラウス：ワルツ〈天体の音楽〉 op.235

Josef Strauss: *Sphärenklänge. Walzer*, op.235

1868 年、ヨーゼフ（1827～70）は医学舞踏会の音楽監督に再任され、1 月 21 日のゾフィーエンザールでの舞踏会に同曲を献呈しました。通常、献呈曲には主催者と関連のあるタイトルを付す習慣がありましたが、このワルツには医学と無関係のタイトルが与えられました。当時の新聞評には、「タイトルに比べれば、このワルツのメロディーはずっとよい」と書かれています。序奏冒頭の神秘的な和音は、音画的なワルツを志向するヨーゼフの心意気を感じさせますが、続くワルツの音楽は人びとに現世の喜びを与えました。

ヨハン・シュトラウス 2 世：ポルカ・フランセーズ〈歌う喜び〉 op.328

Johann Strauss Sohn: *Sängerslust. Polka francaise*, op.328

1868 年、ウィーン男声合唱協会の創立 25 周年を祝して作曲され、10 月 12 日の「リーダーターフェル」（ゾフィーエンザール）で初演されました。この際、団員ローレンツによるハルモニウムと、ヨハンとヨーゼフ兄弟によるピアノ連弾が伴奏を担当しました。歌詞は〈美しく青きドナウ〉の最初の作詞者であるヨーゼフ・ヴァイルによります。合唱版は大成功を収め、〈美しく青きドナウ〉のライバル出現と評されました。管弦楽版は 10 月 15 日にクアサロンで演奏。市立公園のシュトラウス像の横に位置するクアサロンで、ヨハンが指揮をしたのはこの 1 回のみでした。日本ヨハン・シュトラウス協会では、「歌うことが楽しく喜びである」という意を汲み、邦訳を〈歌手の喜び〉ではなく、〈歌う喜び〉に決めました。

ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ・シュネル〈休暇旅行で〉op.133

Josef Strauss : *Auf Ferienreise. Polka schnell*, op.133

1863年2月11日、ウィーン大学病院の内科医ヨハン・オッポルツァー博士（1808～71）の呼びかけで、「学生健康組合」を支援する学生舞踏会が王宮で開催されました。ヨーゼフはここで〈休暇旅行で〉を初演します。博士は全身の状態から診断をくださる医術の提唱者で、休養が必要な仲間へのチャリティーが舞踏会の目的でした。陽気なトランペットが、旅立ちの合図を奏します。

ヨハン・シュトラウス2世：オペレッタ《ニネッタ侯爵夫人》第3幕への間奏曲

Johann Strauss Sohn: *Operette "Fürstin Ninetta", Entr'acte zwischen 2. und 3. Akt.*

ヨハン・シュトラウスは、1892年に初のオペラ《騎士パースマーン》を宮廷歌劇場で発表し、オペラ作曲家の仲間入りを果たします。しかし、オペラは失敗に終わりました。失意のヨハンは次作に再びオペレッタを選びます。それが1893年1月10日にアン・デア・ウィーン劇場で初演された《ニネッタ侯爵夫人》です。間奏曲はこの劇作品のために書かれましたが、オペレッタの上演に際しては〈新ピツィカート・ポルカ〉op.449が間奏曲として使われ、この曲は演奏されませんでした。「《ニネッタ侯爵夫人》の第2幕と第3幕の間奏曲」と明記された自筆譜がウィーン市立図書館に保管されています。

エミール・ワルトトイフェル：ワルツ〈スペイン〉op.236

Èmil Waldteufel: *Espana. Walzer*. op.236

ワルトトイフェル（1837～1915）はフランス・アルザス出身の作曲家。27歳でナポレオン3世の皇后ウジェニーの宮廷ピアニストになり、その後は自身の楽団を組織して宮廷舞踏会を指揮しました。1874年に当時の英国皇太子エドワード7世に気に入られ、バッキンガム宮殿で御前演奏を行い、ロンドンで名声を確立します。日本では〈スケーターズ・ワルツ〉が有名ですが、ウィーンではほとんど演奏されませんでした。〈スペイン〉（1888）は、シャブリエ（1841～94）が1883年に発表した狂詩曲〈スペイン〉に基づくワルツです。

ヨーゼフ・ヘルメスベルガー1世：〈舞踏会の情景〉

Joseph Hellmesberger senior: *Ball-Szene*.

ニューイヤークンサートで近年お馴染みのヨーゼフ・ヘルメスベルガー2世（1855～1907）は、1901～03年にマーラーの後任としてウィーン・フィルの首席指揮者を務めた人物です。今年には彼の父ヨーゼフ1世（1828～93）の作品が演奏されます。父もヴァイオリン奏者であり、ウィーン宮廷歌劇場とウィーン・フィルのコンサートマスター、楽友協会演奏会の音楽監督のほか、ウィーン音楽院の学長を長年務めました。同曲はヨーゼフ・マイセーダー（1789～1863）による〈6つのヴァイオリン練習曲〉op.29から第6エチュードを引用しています。同じくマイセーダーを引用した〈嵐の情景〉とともに、アウグステ・フォン・カヴリアーニ伯爵夫人に献呈されました。

ヨハン・シュトラウス1世：〈ため息のギャロップ〉op.9

Johann Strauss Vater: *Seufzer-Galopp*. op.9

シュトラウス家の父ヨハン1世は居酒屋の息子として生まれ、19世紀前半に人気を二分するランナー（1801～43）と同じ楽団に所属していましたが、二人で独立し、さらにそれぞれの楽団を率いるようになります。同曲は、ヨハン1世が自分の楽団を設立して間もない頃（1828年）の作品。1820年代にウィーンで大流行したギャロップは、舞踏会場を疾走するような激しい踊りでした。そのせいで息はあがり、呼吸困難になる人もいたといわれます。ギャロップは激しさゆえに「健康を害する」という理由で禁止されました。曲の終盤で、演奏者と踊り手の「ため息」が聞えることでしょう。

ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ・マズルカ〈とんぼ〉 op.204

Josef Strauss : *Libelle. Polka mazurka, op.204*

ポルカ・マズルカとは、ポルカのステップとマズルカの3拍子を組み合わせた曲種です。1866年夏のケーニヒツグレーツの戦いでオーストリアがプロイセンに敗れ、世相が沈む中、ヨーゼフはフォルクスガルテンで開かれた10月21日の演奏会で〈とんぼ〉を初演しました。大々的な宣伝をしなかったにもかかわらず、喝采を浴びました。羽をならして水辺を飛ぶ「とんぼ」を描写しています。

ヨハン・シュトラウス2世：〈皇帝円舞曲〉 op.437

Johann Strauss Sohn: *Kaiser-Walzer. op.437*

1889年、ベルリンに「ケーニヒツバウ」という名前の演奏会場が完成し、10月19日から5日間の「こけら落とし演奏会」に、著名な音楽家たちが招待されました。しばらく演奏活動から遠ざかっていたヨハン2世でしたが、この招待を受けて〈皇帝円舞曲〉を作曲しました。タイトルは「皇帝」が誰かを明示していません。ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世とも、オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ1世とも考えられ、じつに巧妙です。10月21日に初演され、またたく間にヨーロッパ中で評判になりました。音楽はプロイセン風の行進曲（序奏）に始まり、次第にウィーン風ワルツの情緒を強めていきます。

ヨハン・シュトラウス2世：ポルカ・シュネル〈狩り〉 op.373

Johann Strauss Sohn: *Auf der Jagd. Polka schnell, op.373*

ピアノ初版譜の表紙には、森で狩りをする人びと、猟犬、そして獲物の鹿が描かれています。軽快なポルカは、4作目のオペレッタ《ウィーンのカリヨストロ》(1875年2月27日、アン・デア・ウィーン劇場初演)のモチーフで構成されています。しかし、劇は魔術師カリヨストロの話で、「狩り」とはまったく関連がありません。モチーフを使って新たに狩りの音楽が構築されました。銃の発砲を合図に「狩り」を楽しむ様子が伺えます。1875年8月5日に、ヒーツィング（現在の13区）の「ノイエ・ヴェルト」で開かれた庭園プロムナード・コンサートで、エドゥアルトの指揮により初演されています。

アンコール

ヨハン・シュトラウス2世：ポルカ・シュネル〈突進〉 op.348

Johann Strauss Sohn: *Im Sturmschritt. Polka schnell, op.348*

ヨハン2世は、オペレッタの第1作として《インディゴと40人の盗賊》を1871年2月10日にアン・デア・ウィーン劇場で初演します。〈突進〉はこのオペレッタのモチーフを用いて構成された楽曲です。5月19日にフォルクスガルテンで開かれた祝賀コンサートにおいて、エドゥアルトの指揮で初演されました。